

できないことを、ローレンがやってのけたと  
いいたいのかい？」

それを聞いて、平賀は慌てて否定した。

「それは違います。私はかねてからローレン  
には自分が機械であるという自覚を持たせ  
られていました。ですから、人間だなどは  
思っていないかったです。ですから、それを  
隠すようにと命じられていました」

「なぜ、隠す必要がある？」

「それは……」

あなたを傷つけないためです、と平賀が続け  
ようとしたが、先にロベルトが口を開いた。

「君は生きているよ」

そういって、肋骨に相当する外郭の内側を  
ゆっくりと撫でくり回した。

「う、く……っ」

平賀はぞつとして思わず目をつむった。無機  
質な感触のパーツが時々ロベルトの手にあ  
たる。その様子を平賀は、じつと見つめてい  
た。ふいに問いかける。

「……ロベルト……あなたの手は、その、とて  
もあたたかいのですね」

「そりやあそうさ。生きているからね」

「……私は、生きていないので、冷たくて無骨  
です」

それを聞いてロベルトは悲しくなり、反論し

た。

「でも、こうして温度を感じているのだろう。だとしたら、きみもまた人間に近いのかもしれないよ」

「そうでしょうか」

「そうだとも」

そういうと、ロベルトは平賀の目を青い瞳でじっと見つめる。ブルーサファイアのような、青く暗い瞳で……。

「君の心臓はどこにあるんだい」

「心臓……ですか？　それは、ロジックボックスのことでしょうか？」

「なんだって？」

「私の本体にあたる部分です。十二個の五角錐からなる、感知したすべての情報を分析・統括・演算する機関です。

ローレンは私が信心深い神父だからといって、十二の五角錐にはそれぞれ十二使徒の名前を付けてくれました。これをなくすと、魂が抜けたようになってしまいます。ですから、人体でたとえるなら、心臓に相当するかと」

そういつて平賀は、ぼつかりとあいた肋骨の下に手を入れ、ここですと示した。そこには十二個の五角形を張り合わせた正十二面体の箱があり、それぞれに十二使徒を象徴する

様々な十字架の意匠がとりつけられていた。そして、あらゆる面から無数のコードがでて  
いる。

「これが…君の心臓なのか…」

ロベルトは平賀の正十二面体の形をした心臓を握り、ゆっくりと取り出した。途中で、コードが何本かはずれる。コードが外れた衝撃で、どこか具合が悪くなったのか、平賀の表情は目をとろんとさせどこか宙を見ているようだった。

ロベルトは肋骨の内側から正十二面体の心臓を取り上げると、平賀の眼前に出した。

「僕はね平賀。君のことを、僕にとっての善き

羊飼いのように思っているんだよ。これまで幾度となく、闇のふちで死にそうになっている僕を、君は温かい手で救い上げてくれた。土砂崩れに巻き込まれた時だって、そうだった。君は最後まであきらめず、僕を助けようとしてくれたんだ……なのに死んだ。そんなのって、あると思うかい？僕は許せないね。だから、君は死んでない。いま、それを証明して見せるよ」

ロベルトはそこまで言いき切ると、平賀の心臓を食むようにして、接吻した。何度も、何度も……冷たい輪郭にロベルトの温度が伝わる。

「ロベルト！やめてください……そんなことをしたら私の心臓が……壊れて……しまいませ……」

平賀はそこでこと切れた。冷たい人形へと戻るその刹那、ロベルトは後頭部に衝撃が走る。そして視界が白黒と反転し、意識を失った。

どさりと倒れた彼の後ろにはロベルトの聖書をもったローレンが、冷たいまなざしで倒れたロベルトを見下していた。

\*\*\*

物語は少し前へとさかのぼる。

平賀は機械仕掛けの体をしているがゆえに、

定期的にメンテナンスをうけ、動力を充電しなければならなかった。平賀がローレンの部屋に来た際、いつもついでに行っているのである、が……。今日はいつも現れるはずの時間になっても平賀は現れなかった。メールで連絡を取ろうと試みても、いつまでも返信が来ない。おかしい。そう思ってローレンは心当たりのある場所を次々と当たり、たどり着いた先で、先のような事態に遭遇した、という顛末だった。ローレンがふと見ると、ベツトサイドには、透明なグラスでつくられた水差しのような形をしている壺が置かれていた。中に青い水が半量ほど入っている。彼の

瞳のような色をした水は、さしずめ、ロベルトの悪夢の蒸留水といったところか。

ローレンは、憎々しげにその壺を一瞥すると、平賀を回収してロベルトの家を後にした。

しばらくして平賀が目を覚ますと、独房の冷たい天井が目に入った。

「私は、倒れてしまったのですね」

寝たままの状態です。平賀が問う。ローレンは、PCに向かっていた。画面を見たままの状態です。

「起きたか、平賀」

平賀は、起き上がった。どうやら独房のソ

ファに寝かされていたようだ。

「はい……あの、よく覚えていないのですが、私はどのようにしてここに運ばれてきたんですか？」

「ロベルトの家で君がばらばらになっていたので、だから私が回収して、修理したところだ」

「そうでしたか……いつもすみません」

「いいよ。私が君の制作者なんだ。それよりも平賀、君はロベルトに心臓を触らせたのか？」

「はい、確かそうだったと思います」

ローレンはそれを聞くと、不機嫌そうに爪を噛んだ。

「またやってくれたな。俗悪な男め」

平賀は小首をかしげた。

「なぜ、彼が俗悪なんですか？ロベルトはそんなことありませんよ」

「君が機械仕掛けだということがばれてしまった」

「でも彼は、私のことを生きるているようだと言ってくれました。ぬくもりを感じられるのなら、また私も人間に近い存在なのだと」

「それを君は、どう思う？」

「どう、とは……？」

「自分のことを、本当に生きている、と思ったのか？」

「いえ、私は……」そこで平賀は一度黙りこんだ。数秒後、再び口を開く。

「今はなんとも、言えません」

「そうか……バグが起こらなければいいが」

ローレンはそこまで言うのと、数日後にまた会おうと言い、平賀を自宅に返した。

数日後、ローレンの独房にやってきた平賀はいつものように、天使と悪魔のゲームに座しながら、他愛のない会話をした。その中で、平賀が突然、ローレンの恐れていた話を切り出した。

「ところでローレン、聞いてください。私はこの間、夢を見ました」

「夢？」

ローレンは片眉を吊り上げ、訝しむように平賀を見た。

「私はその夢の中で羊飼いの姿をしていました。周りにはたくさんの羊たちの群れがあり、私はその中でどこまでも続く緑の平原を見ながら、穏やかな気持ちでたたずんでいたのです。夢を見るのは生きている証拠ですよね？　だとしたら、私はやっぱり生きています！　あなたが以前言っていたように、機械仕掛けなどではなかったんです。ローレンはおかしな冗談が好きなんですわね」

そういってにっこりと笑う平賀神父の額を、

ローレンは無情に人差し指でちよんとつつく。すると、独房で天使と悪魔のゲームに座して向かい合う二人の間に静寂が訪れた。

……平賀は時間を止めたように動かなくなつたのだ。正確に言えば、OFFのスイッチを押して、機能をシャットダウンさせた。人差し指の下で、平賀はゆっくりと目を閉じる。ローレンはしんと静まり返つた独房でぼつりとつぶやいた。

「君はまた自分が機械仕掛けであるということを忘れてしまったようだな」

「私が君を作つたのは、ただゲームの相手が欲しかったからだ。君を生きたい人間にしたい

わけではない。そんなことをしたら……」

そこまで言いかけ、ローレンは平賀の形をしているそれをゆっくりとソファに横たえた。

「……可哀そうじゃないか」

ローレンはぼつりとつぶやいた。

平賀が自分を生きると思っていること。それは同時にロベルトが彼に生者であるという認識を持たせてしまうことでもあった。ローレンに対し、神への冒瀆だなどとのしりながら、一番神を冒瀆していたのはほかでもない、ロベルト自身だったのだ。そうして自分のことを本当に生きていると思ひ込むようになった平賀はどう思うだろう？

う？

君との寿命に差がありすぎることを。住んでいる世界が違いすぎることを。そして、自分は、本物の平賀の現身でしかないということ……。

俗悪なロベルト。彼を機械仕掛けだと知ったうえで、尚も人間にしてなにになる？ 悲劇的だよ。

ローレンはロベルトが平賀を人間だと思ひ込む嘘によってしか、秩序を保てないこの不完全な世界を作ってしまったことに心底うんざりした。いい加減に察してくれ。平賀が可哀そうじゃないか。……可哀そう……僕と



ゲームをしてくれるだけでよかったのに。

ローレンは「可哀そう」などという、じれったくくだらない感情を持っていることで自己嫌悪した。何もかもが悪夢的だ。

ソファに横たえられた平賀の白いうなじにある蓋を開け、パソコンとコードを繋いだ。バグを修正していく。これから行うデバック作業には、バグを起こした前後の記憶をなくすという副作用が伴う。これは、システムの設計上必要なプロセスだ。彼の記憶を削除する。そして彼の自宅に送り返し、いつも通りの日常を送らせる。おそらくロベルトは、平賀が退院祝いで彼の家に来るといふところ

からやり直すのだろう。彼が平賀の家に電話をかける様子が目に浮かぶ。そしてこう言うのだ。「ようやく退院できたんだってね？うちでゆっくり退院祝いのパーティをしないかい？時間はいついつで……」と。

これで何度目だろうか。ローレンが記憶をたどれる限りでは、すくなくとも587回はこうして同じバグを修正している。きっとロベルトは気づいている。平賀の心臓にキスをしたら彼が羊飼いの夢を見るときに。そして、私がそれを修正し、再び送り返すことで無限にループしていることを。どうして彼はそこまでして平賀を人間にし

たいんだ？私にはわからない。理解しがた  
い。

クラインの壺にとらわれた悪夢には、終わり  
も無ければ始まりもなかった。

思えば、いつからこの悪夢にとらわれている  
のか、はつきりと思い出すことができない。  
人は有限の存在だからだろうか。故に無限を  
うまく認識することができないのだ……だ  
が、少なくとも、自分で認識できる回数……ゆ  
うに587回は、ロベルトが平賀の胸をこじ  
開け、心臓にキスをしたと言える。  
587回だ。狂ってやがる。私ですらもうた  
くさんだ。

だからそろそろ、この忌々しいクラインの壺  
をたたき割ることにしよう。

起きろ、ロベルト。昼寝の時間はもう終わり  
だ。

\*\*\*

ガツシャーン。枕元で響くけたたましい音で  
ロベルトは目を覚ました。

見ると、枕元においてあった平賀神父の私物  
である水差しのような形をした壺を、寝返り  
を打ったはずみで叩き割ってしまっていた。  
(まずい……あとで彼の家に届けようと思っ  
ていたのに)

中からあふれ出した液体と破片を始末しな

がらロベルトはため息をついた。

それは、花瓶のような、水差しのような形をした奇妙な壺で、先日一緒に行った青空市場で彼が気に入り、購入したものだ。青空市場で買いい物をした後、そのままロベルトの家でディナーをとり、平賀が帰る際、忘れていったのが……確か、そう。クラインの壺だ。

あとで平賀に謝らなくてはならない……。

ロベルトは少し良いレストランで、彼に食事をおごることにした。

ローマ市内某所のレストランにて。

「すまない、平賀……その、わざとではないんだ。許してくれ」

ロベルトは平賀に頭を下げた。平賀は慌てて、それを制する。

「そんなに謝らないでください。どうせ安物でしたし、手に入りにくいものでもありませんから」

ロベルトはほっと胸をなでおろした。

そう言って優しく許してくれる、平賀はさながら大天使のようだ。

「話が変わるんだが、この間、どういうわけかおかしい夢を見てね」

ロベルトは夢で起きた不思議な出来事を語った。

平賀はその話を聞いて、ふむと顎に手を添え

ながらしばらく考え事をしている。思考が宇宙のかなたにいつているのだろうか。そして、ふと何かを思いついたように口を開いた。

「ロベルトの話を知っていると、クラインの壺を想像します」

「君も夢の中のローレンと同じようなことを言うね。僕にはそのたとえがいまいちよくわからないのだが」

「ローレンとは似たもの同士ですからね。」  
そんなことはないと思つたが、ロベルトが言い加える前に、平賀は続けた。

「メビウスの輪ってありますよね？」

「ああ、よくあるひねった紙で作られた輪で、表をたどっていくといつのまにか裏をたどっていると、あれだろうか？」

「はい、イメージとしてはそれに近いものだと思います。」

クラインの壺とは、位相幾何学の分野で扱われる曲面の一種です。あなたの見た夢……ここでは、夢の世界が三次元空間とすると、そこに時間を1次元加えた四次元空間があなたの見ていた夢の世界の全体像であり、そのありようがまさしくクラインの壺に似ていると思つたんです。

これは正確には四次元以上の空間でしか成

り立たないのですが、外部と内部に分けられた三次元空間でありながらも表裏の境界を持ちません。これを立体物として作ると……つまり、三次元空間内に無理やり射影すると、自己交差して閉鎖された奇妙にゆがんだ壺のような形になります。ちょうどあなたの家に忘れていった、あの置物のように。

その形態を寝る前に見ていたせいで、あなたの夢の世界は、立体的な三次元空間を軸としてストリーが進みながらも、ある地点に来ると、自己交差した接合部物に行き当たり、時間と空間が無限にループしている閉鎖空間、クラインの壺のような世界になったのでは

ないでしょうか」

平賀は一息にそこまで言いきった。

いつものことながら、ロベルトは平賀の言っていることがよくわからなかった。

考えれば考えようとすると、無限の宇宙を漂っているような感覚に陥る。

「うん、もうわかったから説明はそれくらいでいいよ」

ロベルトは平賀を止めた。そして思った。

あのクラインの壺が枕元に置いてあったせいで、僕はあのようなヘンテコな悪夢を見たんだ。そして、こともあろうに、夢の中でローレンが壺をたたき割ると宣言した次の瞬間

間、本当に壺が割れてしまった。僕は夢の中でも彼に一杯食わされてしまったというわけか。さすがだよ。大天才のローレン殿は。

「ところで君は……本当に生きているよね？」

「何をいきなり言い出すんですか」

平賀は驚いて、フォルケッタを食べているフォークを止めた。

「僕は君の話を聞いてちょっと自信がなくなつたよ。夢の中にクラインの壺があり、現実世界でもやはりクラインの壺がある。夢の世界がこの壺の内側だとしたら、現実世界はその外側で、それらは一続きになっている。

そして壺の内側にためられた悪夢の蒸留水が、いつか外の世界にあふれ出してしまふのではないかとね」

「おかしなことを言わないでください。私はちゃんと生きていますよ。それに」

そこで平賀はふと宙を見た。思考が宇宙の先まで飛んで行っているのだろうか。

しばらくして現実に戻ってきた彼は、内緒の話を告白するように、口元に右手を添えてこつ続けた。

「……それに、ローレンからも言われているんです。機械仕掛けだってことは隠しておいてくださいと」

ロベルトはぞつとした。まさか……だろう？  
「なあんて、冗談ですよロベルト。あなたは信じやすいんですね」

平賀は鈴のようニコニコと笑った。なんて愛らしい笑顔なのだろう。やはり、彼はちゃんと生きていて、この世に存在している。

君の言うことならなんでも信じてしまおうよ、平賀。

ロベルトは平賀の言葉を聞いて、心底安心した。

もうあの機械仕掛けの冷たい心臓にキスをしなくていいのだから。